

# 入館者動向から見たさきたま資料館の利用形態

村田 章人

## 1 はじめに

ある特定の博物館が、どのような利用のされ方をしているのか、利用形態の特徴を明らかにしようとする際、当該博物館の入館者属性や、入館者数の時間的な変動を分析することで、何らかの手がかりが得られると考えられる。公立博物館施設において、一口に「入館者数」といった場合、特定の事業（特別展や教育普及事業など）を除けば、通常は行政の時間的単位として最も一般的な「年度」で括られることが多い。この、年度の「入館者数」の内実がどのようなものであるのか、どのような属性を持つ入館者群によって構成されているのかは、公立博物館施設であれば、通常毎年度刊行される館報や要覧などで、ある程度確認することができる。そのことは、さきたま資料館においても同様であるが、その内実に関するまとまった分析は、これまで公表される形では行われていない。

ここでは、さきたま資料館の入館者動向における、これらの変異にどのようなパターンが認められるかという記述を行う。それにより、さきたま資料館の利用形態がどのような特徴を持つのか、他の県立博物館施設のそれと、どのような変異があるのかを確認したい。

博物館施設の性格付けや、それに基づく運営方針の検討は、政策的な見地からなされるのであろうが、この小論は、そのような検討や政策的な提言を行うものではなく、その基礎となる材料を、誰でもが入手できるデータからまとめるための一つの試みである。

## 2 分析

さきたま資料館における入館者の動向を記述するにあたり、今回は、過去5年間のデータを用いる。分析するのは、年度内の入館者数月別変動、小中学生の入館動向、高齢者（65歳以上）の入館動向である。

入館者数の月別の変動について分析を行う理由は、年度における月別の利用の多寡にどのようなパターンが認められるのか、その特徴を見極めることが館の利用形態を考える上で、基礎的なデータになると考えたためである。月別入館者数については、漠然と5月や秋にその数が増加することは言われているが、そのことをデータとして押さえておくこと、また、入館者数月別変動の年度間の変化に、どのような変異が認められるのかをデータ化することで、さきたま資料館の利用形態の基本的な部分の経年変化を確認するためである。

小中学生の動向について分析を行う理由は、近年博学連携が求められている中で、小中学生の入館動向の現状がどのようなものであるのかを確認することで、小中学生の利用形態を探る手がかりを得るためである。

高齢者の動向について分析を行う理由は、今後、生涯学習社会の中で博物館施設が果たすべき役割を検討する際に、高齢者の入館動向の現状がどのようなものであるのかを確認することで、高齢者の利用形態を探る手がかりを得るためである。

基礎となるデータは、資料館報に記載されている入館者のデータである（埼玉県立さきたま資料館 2001,2002,2003,2004,2005）。ただし、小中学生の個人利用、及び高齢者の区分は、館報には記載されていないため、これらの区分のデータについては、館で保有する入館者記録のデータから補った。

## (1) 年度内の入館者数月別変動

### ア さきたま資料館のデータから

過去5年間の月別の変動を示したものが、表1及び図1である。この図から、次のことを読み取ることができるだろう。

- ◎平成15年度を除くと、どの年度も非常に似通った変動を示している。月別入館者数は、大変に安定した傾向を持っているといえる。この月別の変動は、さきたま資料館における月別の利用形態を表す基本的なパターンと考えてよい。このパターンには以下のような特徴がある。
- ◎5月と10月に、入館者数の大きなピークがある。これは現場の感覚からも実感できることであるが、この2ヶ月で、年間入館者数の約3割を占めている。
- ◎9月の入館者数が1つの谷を形成する。入館者数が他の月に比べて減ずる理由が特に見当たらないだけに、これはやや意外な感がある。
- ◎11月と12月の入館者数の差が大変大きい。12月になると入館者数は激減する。12月の入館者数は、11月の約3割程度入館者数しかない。そしてこの減少した状態は、3月まで継続する。一般に「冬場は人が動かない」などと博物館施設において表現されることがあるが、おそらく、11月の下旬から、入館者数の減が始まるのが推測される。

### イ 他館との比較

さきたま資料館の年度内入館者数月別変動パターンは、他の埼玉県立の博物館施設のそれと比べ、どのような違いがあるのかを確認することで、さきたま資料館独自の特徴を浮かび上がらせることが可能であろう。表2及び図2は、さきたま資料館と他の県立博物館施設における年度内入館者数の月別変動を比較したものである。比較の対象としたのは、県立博物館、自然史博物館、さいたま川の博物館の、平成16年度のデータである（埼玉県立博物館2005、埼玉県立自然史博物館2005、さいたま川の博物館2005）。比較の基礎をなるべく類似したものにするために、博物館は入館者数（展示室内への入館者数）、川の博物館は、本館の入館者数を用いて図化を行った。また、さきたま資料館の入館者数については、前節で見たように、過去5年間の月別の変動パターンにほとんど変異がみとめられないため、図をわかりやすくするために過去5年間の平均を用いた。各館の月別の変動パターンは、月別の変動の特徴をより明確にするために、実数ではなく、年度内における各月の入館者数の比率を採った。図2からは、以下の点

表1 月別入館者数

(人)

	H16年度	H15年度	H14年度	H13年度	H12年度
4月	10,058	10,675	11,221	14,072	14,317
5月	15,842	20,145	21,977	22,201	23,903
6月	12,957	11,700	14,352	14,569	17,691
7月	10,644	15,733	11,516	11,645	13,670
8月	8,199	10,433	9,880	10,687	9,356
9月	6,639	7,144	7,680	9,823	9,554
10月	10,351	12,403	13,587	14,690	15,819
11月	10,364	12,643	9,109	11,299	11,460
12月	2,967	2,801	3,125	3,366	4,353
1月	2,431	3,705	3,133	3,537	2,421
2月	3,468	5,466	4,261	4,103	4,505
3月	4,840	6,024	5,631	7,485	5,113
計	98,760	118,872	115,472	127,477	132,162

表2 他の県立館との比較(月別比率)

(%)

入館者数の比率	さきたま平均	県博H16年度	川博H16年度	自然史H16年度
4月	10.2	7.0	6.4	7.5
5月	17.6	7.4	13.0	13.7
6月	12.0	4.8	7.4	7.0
7月	10.7	8.4	9.9	10.4
8月	8.2	11.4	21.3	17.9
9月	6.9	4.0	7.5	6.6
10月	11.3	17.5	13.1	9.3
11月	9.3	15.5	11.1	12.0
12月	2.8	2.8	2.2	3.4
1月	2.6	8.6	2.4	2.6
2月	3.7	6.3	2.5	3.9
3月	4.9	6.4	3.3	5.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0

図1 月別入館者数

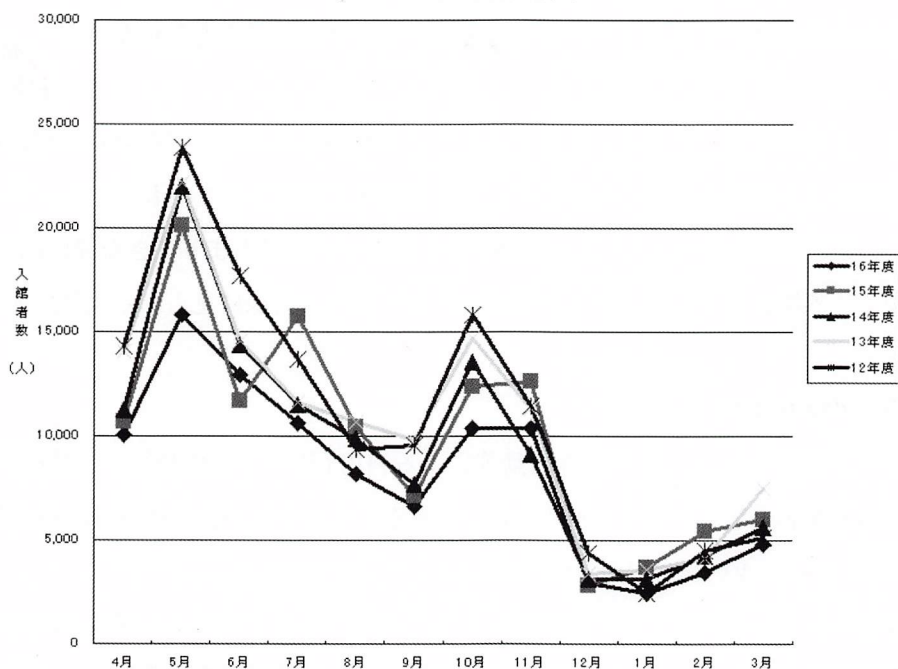
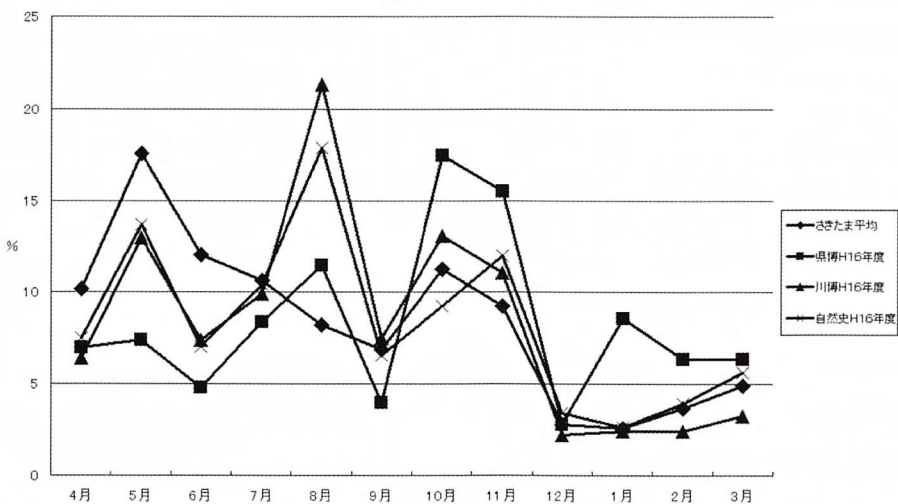


図2 他の県立館との比較(月別比率)





が読み取れると思われる。

- ◎一見して明らかなことは、さきたま資料館以外の館が、7,8月の入館者数に1つのピークがあるのに比べ、さきたま資料館では、6月から9月の間にピークがないことである。これは、さきたま資料館では年間の総入館者数の中で、夏休み期間があまり大きな位置を占めていないことを表している。自然史博物館とさいたま川の博物館が、夏休み期間中の入館者数が多いということは、館の性格から推測できるが、同じ人文系である県立博物館とこのような差があることは、館の利用形態を考える上で、留意すべき事象であると考えられる。
- ◎県立博物館は5月にピークはなく、10,11月に大きな山がある。これは、年間における資源投入が最も大きい特別展が、この時期に行われることと関連があるものと考えられる。他の館では、このような特別展を実施していないため、この時期にピークはあるものの、5月や夏休み時期ほどのピークにはなっていない。この分析は、さきたま資料館の動向を読み取ることが目的としているため、県立博物館の変動パターンには深く立ち入らないが、秋季に大規模な特別展を開催する館の1つのあり方と捉えることが可能かもしれない。
- ◎さきたま資料館の5月のピークは、他の館に比べ著しく大きい。さきたま資料館における5月のピークを構成する内実は、後述するように5割弱が小中学生で占められている。学校の校外活動による利用が、この時期にピークを形成する理由と考えられる。
- ◎7,8月の利用頻度以外では、さきたま資料館と他館との間であまり大きな違いは見られない。秋に多く、冬場には利用者が減る傾向は、どの館でも同様に見られる現象である。

## (2) 小中学生の入館動向

小中学生の利用には、学校の校外活動等による利用(以下「団体利用」と呼称する)、個人による利用(以下「個人利用」と呼称する)がある。それぞれが独自の意味を持つ利用形態であり、必要に応じ、いずれかのデータを用いる。

団体利用の小中学生入館者数の経年変化を表したものが図3である。平成11年度から13年度まで漸減傾向を示し、さらに14年度にかけて大きく減じている。そして、その後はわずかに減じているが、大きな変化はない。平成14年度以降は、平成12年度と比較して、約4割減少している。これは大変大きな減少で、平成14年度以前と以後では、団体利用の在り方が大きく変化したと評価することができるだろう。平成14年度での大きな減少の理由は推測の域を出ないが、学校週5日制導入による校外活動の減少との関連が考えられるだろう。

団体利用と個人利用を合計した小中学生の利用の月別の変動を表したものが、

図3 小中学生(団体利用)

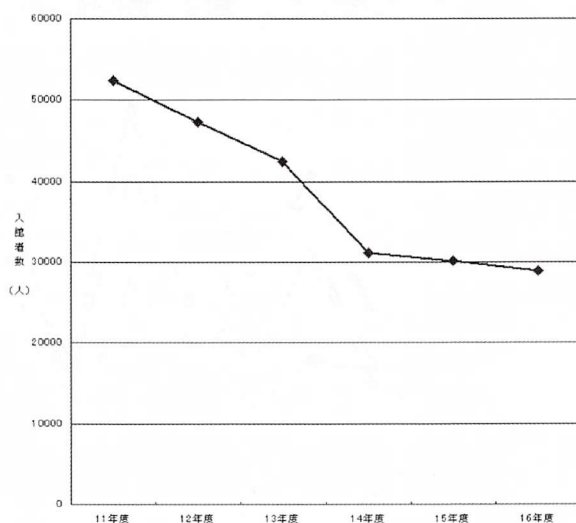


表3 小中学生（全体）の月別入館者数 (人)

	H16年度	H15年度	H14年度
4月	3,988	4,006	3,454
5月	7,140	9,668	11,697
6月	7,805	5,707	6,968
7月	3,489	4,644	2,799
8月	2,085	2,673	2,682
9月	2,291	1,941	2,194
10月	5,263	6,448	7,016
11月	4,508	4,792	3,466
12月	655	530	1,005
1月	373	470	516
2月	372	702	620
3月	506	1,054	645
計	38,475	42,635	43,062

図4 小中学生（全体）の月別入館者数

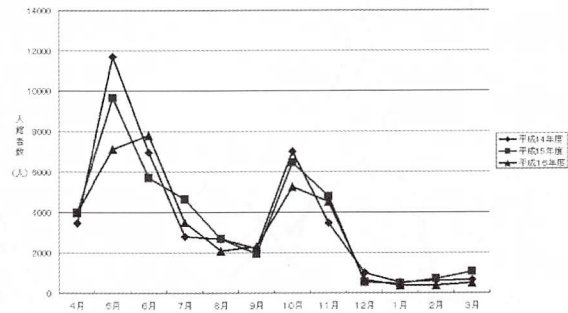


表4 高齢者の月別入館者数 (人)

	H16年度	H15年度	H14年度
4月	921	774	1,024
5月	940	1,358	1,024
6月	1,112	1,053	1,064
7月	1,374	2,062	1,685
8月	423	685	506
9月	638	693	763
10月	832	1,152	1,339
11月	795	1,482	745
12月	356	355	604
1月	174	249	201
2月	619	546	485
3月	579	874	844
計	8,763	11,283	10,284

図5 入館者属性の比率

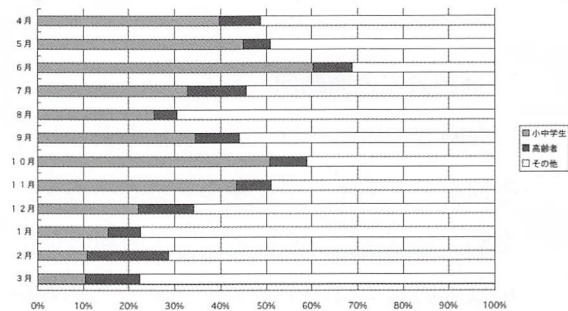
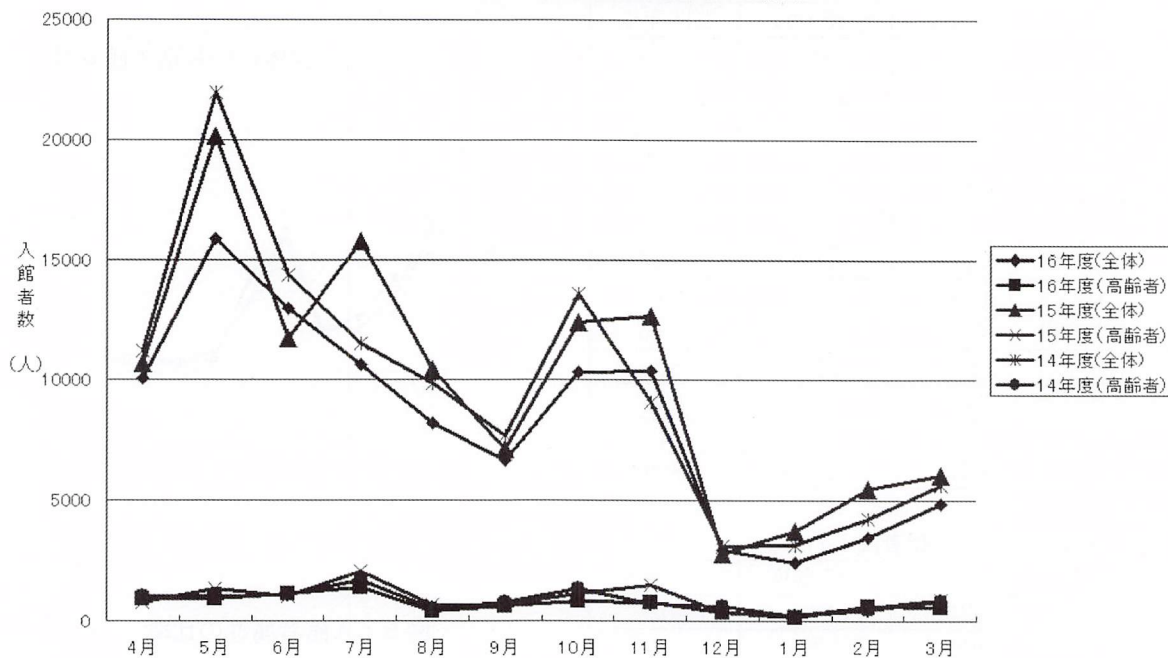


表3と図4である。全体入館者と同様、小中学生の入館者数も、5月と10月にピークがある。全体の入館者数同様、7,8月には利用の山はない。実数としては、7,8月とも2～3,000人を超える小中学生の利用があるが、他の時期に比べ、夏休み期間中の利用は、さほど活発ではないことが伺える。

また、平成16年度は、それ以前と比べ、5月、6月の利用にやや違いがある。ピークの頂点が6月にシフトしている。このことは何に起因しているのか、要因を特定することはできないが、今後続く傾向であるのかどうか、興味深い現象である。

全体入館者数に対する小中学生入館者数の比率の月別の変動はどのようなものであろうか。図5は、平成16年度単年度のものであるが、全体の入館者の中で小中学生が占める割合を比率にしたものである。5月、6月、10月は、小中学生の入館者は全体の入館者数の約5割から6割程度の割合を占めるが、7～9月は比率が下がる。これは、夏休みの影響であることが推測される。当館は夏季に利用者数が減少することは前節で見たとおりであるが、特に小中学生の利用者減少によるところが大きいことがわかる。5月、6月、10月は、図1.2に見られるように、さきたま資料館の入館者数が多い月であるが、これらの月では、その半数近くが小中学生による利用で占められている。

図6 全体入館者数と高齢者の動向



### (3) 高齢者の入館動向

高齢者の入館者数の経年変化を表したものが表4と図6である。高齢者の入館動向の特徴は、年間を通じあまり変化がないことである。図1,2のように全体の入館者数が月によって大きく変動し、図4のように小中学生の利用が月によって大きく変動しているのに対し、高齢者の利用はどの月もほぼ平均している。この傾向は、過去3年間の比較では、ほとんど変化がない。ただし、細かく見ると3年間とも、7月に高齢者の入館者数が他の月に比べて多いことが認められる。他の月との差はそれほど大きいものではないが、3年間共通した減少であることから、一定の傾向と考えることが可能であろう。

しかし、いずれにしても、全体の入館者数のうち、高齢者が占める割合は10%以下の月がほとんどである。

## 3 考察

これまでの分析によって、入館者動向から考えられるさきたま資料館の利用形態について、繰り返しになる部分も含め、まとめる。

### (1) 年度内の入館者数月別変動

さきたま資料館の月別入館動向は、過去5年間、大変類似した傾向を持っている。このことが、最大の特徴であるとも言える。この傾向をもたらしている要因はどのようなものであるのか、推測することは難しいが、利用の形態が、何らかの形で固定的な状態となっていることが考えられる。

また、他の県立館と比較して、7,8月期の入館者数の比率が低い。当館の利用形態の、現行



における特徴といえるだろう。あくまで、他の月との比率の問題なので、夏休み期間中の利用が低いということではないが、館の利用形態を考える上で、考慮に入れるデータであると思われる。

## (2) 小中学生の入館動向

さきたま資料館の入館者数において、小中学生は大変大きな比重を占めている。しかも夏休み期間中の割合よりも、5月と10月において、高い比率を占めている。さきたま資料館の現行の利用形態が、学校の校外行事と深く結びついているということが、データから読み取ることができる。

## (3) 高齢者入館動向

さきたま資料館の入館者数において、高齢者が占める割合は10%内外である。この数字をどう見るかは多様な意見があると思われるが、筆者としては、館の性格から考えた場合、大変低い割合であると感じた。今後、社会の高齢化が進展する中で、人文系の博物館施設が高齢者のニーズに応じていくことは、必然的に要請されるものと思われる。さきたま資料館では、これまで高齢者にターゲットを絞った事業があまり多くはなかったともいえるが、まったく手をこまねいていたわけではない。ハイ・アマチュアを対象とした講座や講演会も一定程度行ってきた。にもかかわらず、入館者における高齢者の利用があまり伸びていないとはいえないことは、今後の事業計画を考える上で考慮に入れなければならないデータであると考えられる。

## (4) 全体の入館動向

(1)～(3)にみられるとおり、さきたま資料館の入館傾向は、全体・小中学生・高齢者とも年度におけるバラつきや変動がほとんど見られないという特徴を持っている。わずかに、小中学生の入館者数が、平成13年度と14年度の間で減少が見られる程度である。年度によって入館動向に変化が見られないということは、さきたま資料館の利用形態における大きな特徴の1つといえるだろう。この、年度による変化がほとんどないということをどのように評価し、今後の事業運営にどのように反映させるべきかの検討は、この小論の目的とするところではないが、検討の材料となる事象であると考えられる。

## 4 結語

入館者の動向から、館の利用形態について考えられることを述べてきた。筆者の考察は、データの持つ潜在的な意味をどの程度把握できているのか、甚だ心もとない限りであるが、さきたま資料館の入館者動向はこれまで、あまり表立っては検討されていないと考えられたため、何らかの意味があるものと考えた。このようなデータは、博物館行政をめぐる政策判断の材料とされることもありうる。どのような判断が可能なのかは、時々の流れの中で、様々であろう。筆者とし

ては、入館者動向から、館の利用形態を、より実証的な形で探ることを目的としたが、データの掘り下げは表面的なところにとどまっているのであろう。また、利用形態は、入館者数に関連したものだけではないことは、いうまでもない。より詳細な年齢構成や居住地、滞在時間や来館目的など、多種多様なデータの収集が望まれるところである。

また、他の施設との比較では、県立館との比較にとどまったが、さきたま資料館が立地する行田市の観光来訪者のデータなどと比較することで、さきたま資料館の利用形態の特徴を、より明確にすることが可能であると思われる。

今回検討した「入館者数」の変動（経年変化や年度内の継時変化）や、入館者属性の比率の様態は、多くの要因に影響を受けており、単一の要因に帰することができるとは考えられないことが推測される。現状のデータのあり方から、その「あり方」が発現する背景を探り、利用形態の実態に迫ることで、館のあり方に関する議論をより実りあるものにするのが可能であると思われる。漠然と考えている自己認識と実態とでは差異がある可能性もある。館の性格付けやそれに基づく運営方針の検討の基礎となる具体的なデータは、入館者属性に関するものであれば、入館の記録や来館者へのアンケートなど、様々な手段を駆使してまとめ上げる必要がある（註1）。

註1 たとえば、高齢者による利用が、全体の1割前後にとどまっているという現象は、ある種の「歩留まり」ともいえる。歩留まりが高いという事実は、潜在的な利用者の存在を意味しているとも言える。

## 引用文献

- 埼玉県立さきたま資料館 2001 『資料館報 No.32』
- 埼玉県立さきたま資料館 2002 『資料館報 No.33』
- 埼玉県立さきたま資料館 2003 『資料館報 No.34』
- 埼玉県立さきたま資料館 2004 『資料館報 No.35』
- 埼玉県立さきたま資料館 2005 『資料館報 No.36』
- 埼玉県立博物館 2005 『埼玉県立博物館要覧 第31号』
- 埼玉県立自然史博物館 2005 『埼玉県立自然史博物館報 第18号』
- さいたま川の博物館 2005 『要覧 第9号』